

知ること。伝えること。

— 那須農場の歩みを、未来へつなぐ —



自由学園創立者・羽仁もと子・吉一先生が掲げた「生活即教育」。それは、生活こそ教育そのものであるという考え方です。

那須農場は、その理念を実践する場として、1941 年(昭和 16 年)の開拓以来、多くの人々に支えられながら歩みを続けてきました。開拓農場から酪農農場へ、そして教育農場へ。その歴史には、多くの人々の働きや思いが受け継がれています。

那須農場支援活動では、作業を終えた夕食の時間に、先輩方が那須農場の歴史や思い出を語ってくださることがあります。そのお話は参加者にとって大変貴重な時間ですが、その場に居合わせた人しか聞くことができません。

そこで、この「知ること。伝えること。」では、那須農場支援活動の中でお話いただいた内容をもとに、その歩みや思いを多くの方へお届けします。

このシリーズでは、開拓から教育農場への歩みをたどるだけでなく、その歴史が東日本大震災後の卒業生による那須農場支援へどのようにつながっていったのか、そして現在の活動へどのように受け継がれているのかを、関わってこられた方々のお話を通してご紹介していきます。

これから支援活動に参加される方には働くことの意味を、これまで参加された方には新たな発見を、そして遠方などの理由で参加がかなわない方にも、現在の那須農場の歩みを感じていただければ幸いです。

第三回

男子部 46 回生 中村英俊さんが語る

0.23 から 0.13 へ 学生を那須農場に戻すための 5000 日

現在、那須農場では学生の活動が再開され、本稿で紹介する除染活動も終了しています。
本稿は東日本大震災後に行われた活動の記録であり、現在は学生が活動している農場です。

シリーズ第三回では、那須農場支援活動の中で中村英俊さんにお話しいただいた「0.23 から 0.13 へ、学生を那須農場に戻すための 5000 日」をもとに、内容をできるだけ忠実に整理し、読みやすい形にまとめました。

中村さんは、東日本大震災後の 2012 年から那須農場の支援に関わり、長年にわたって放射線量の測定と除染活動を続けてこられました。国の長期的な目標である $0.23 \mu\text{Sv/h}$ を達成した後も、学生を再び那須農場へ迎えるため、 $0.13 \mu\text{Sv/h}$ を目標とした活動を続けてこられました。

今回は、その 5000 日を振り返りながら、試行錯誤を重ねた除染活動と、それを支えた多くの人たちとの関わり、そして「学生を那須農場に戻したい」という想いについてお話しいただきます。



※本稿では、学生・生徒を総称して、「学生」と表記します。

※自由学園では先輩のことを「君」付けで呼びます。

2026 年 8 月の那須農場支援活動より



第1章

那須農場との関わりの始まり

題して、「0.23 から 0.13 へ、学生を那須農場に戻すための 5000 日」。

若干、大げさのように感じる方もおられるとは思いますが、正直、私もそう思います（笑）。

ただ、私が那須農場に関わるようになった 2012 年から今日までを数えてみると、およそ 5000 日強になります。

もちろん、ずっと那須にいたわけではありませんし、必ず毎週来たわけでもありません。それでも、この間、頭のどこかに常に那須農場があったのは確かです。

今日は、その 5000 日を振り返りながら、那須農場で行ってきた除染活動についてお話ししたいと思います。



大阪に帰るから、 免許を取ってくれ

私が那須農場に関わり始めた頃は、同級生の濱田の車で那須を往復していました。濱田が来られないときに初めてマイクロバスに乗り、先輩の松原君、T君の運転で何度か往復しました。今から思えば、マイクロバスに乗せてもらったのは、ほんの数回だったと思います。

翌年、2013年の年始、松原君に平日の夜、突然、新宿の飲み屋に呼び出されました。そして一言、「大阪に帰るから、マイクロバスの免許を取ってくれ」と。なかなか強引な引き継ぎです。30年、40年経っても、1年（中1）のときの6年生（高3）との関係は変わりません（笑）。

すぐに免許を取得したら、その後、松原君とT君がはしばらくの間、那須に来なくなり、結果として約1年半、毎月マイクロバスを一人で往復運転することになりました。これが、私が頻繁に那須農場へ通うようになったきっかけです。

最近の後輩の林さん（55回生）をはじめ、免許を取ってくださる方も増えました。今後も少しずつでも増えてくれるとありがたいと思っています。



第2章 0.23 から 0.13 へ

那須農場の除染には三つの時期があった

ここから、除染の話に入ります。今回参加された方々には、東日本大震災後に生まれた中等部の生徒も多く、「除染」という言葉にあまり馴染みがないと思いますので、最初に簡単に説明します。

2011年3月11日、東日本大震災が起きました。巨大地震と津波の影響で福島第一原子力発電所で大きな事故が起こり、放射性物質が広い範囲に飛散しました。その影響は福島県内だけではなく、栃木県にある那須農場にも及びました。

濃度の高い場所の土を取り除いたり、入れ替えたりして放射線量を下げる。それが除染です。私は那須農場で空間線量計を持ち歩き、計測し、土を掘り、また測り、数字が下がらなければもう一度掘る、ということを長い間続けてきました。

那須農場の除染活動については、これまで幼方さんや阿部さんからもお話がありました。除染活動を細かく分ければ、私は三つの時期があったと考えています。

第1期：震災直後の除染

第1期は、東日本大震災と原発事故の直後です。農場職員の皆さんを中心に、牧草を全量廃棄するなど、本当に大変な作業が行われました。

私はその時期の活動を直接担ったわけではありません。しかし、何も分からず、先の見えない中で対応に当たった職員や関係者の皆さんの苦労は、後から活動に加わった私たちには想像しきれないものだったと思います。

第2期：卒業生による復興支援

第2期は、男子部41回生を中心として、男子部卒業生会である同学会で立ち上げた「那須農場復興支援室」の毎月の活動です。私はここからの参加となります。

私が担当したのは、線量の高い場所を見つけ、土の上と下を入れ替える「天地返し」を行うことでした。当時すでに鉄くずを集めて売っていましたが、汚染されているため返却されたこともありました。それなりに線量の高い

状況であったと思います。

天地返し、高圧洗浄機での洗浄、環境美化などの試行錯誤を重ね、第2期の活動によって、国が除染の長期的な目標として示した $0.23 \mu\text{Sv/h}$ （マイクロシーベルト毎時）をクリアしました。

普通なら、国の示す長期的な目標を達成したので、ここで除染活動は終了です。同学会の活動も終了。

しかし、学生が那須農場に来ることはありませんでした。

教育の方針上、もう昔行っていた修養会などは行わないのかな、という理解でした。

0.23 と 0.13 二つの数字

ここで、二つの数字について説明します。0.23 と 0.13。単位はマイクロシーベルト毎時。その場所に1時間いた場合に、どの程度の放射線を受けるかを示す空間線量率です。

国が示した $0.23 \mu\text{Sv/h}$ は、追加被ばくを年間 1mSv 以下にすることを目指して設定された長期的な目標値です。私たちは普段、自然界や宇宙などから放射線を受けています。それとは別に、事故によって増えた分を「追加被ばく」と考えていただければと思います。

ここで大事なのは、0.23 を少しでも超えたら直ちに危険で、下回れば突然安全になる、という境界線ではないということです。放射線の影響は、線量と時間の積み重ねで考えます。0.23 は、長く生活する環境として、国が安全性に十分配慮して設定した目標です。ですから、第2期の活動によって、那須農場は国が示した長期的な目標を達成しました。

それでも、学生は農場に戻ってきませんでした。

「なぜ学生が来ないのだろう」と聞いてみると、「南沢と同等の環境でなければ、子どもたちを行かせられない」という話でした。

そこで学園が示した新しい目標が、 $0.13 \mu\text{Sv/h}$ でした。南沢キャンパスと同等の環境を目指す、ということです。

0.23 でも、国の示した安全性に配慮した目標は達成しています。しかし、子どもたちや保護者により安心してもらい、学生を農場へ戻すために、さらに 0.13 を目指すことになりました。

私は、この二つの数字を次のように捉えています。

- ・0.23 は、安全を確認するための目標値。

- ・0.13 は、安心して学生を迎えるための目標値。

こうして、第3期の除染活動が始まりました。そして、ここから私のさらなる戦いも始まったわけです。

22:03 4G

＜メモ＞

20200320線量計測

■旧事務室前
 左雨樋0.33→0.10
 木左0.26→0.11
 入口前0.32→0.14→0.12→何故か0.07

■側面
 牛舎側0.14
 駐車場側0.13

■裏
 駐車場側0.18
 牛舎側0.15

■穴の土0.09→掘った所へ

22:00 4G

＜メモ＞

210411除染

○旧事務所脇 駐車場側
 手前0.08 奥0.16 事務所中穴下0.07

○旧事務所裏
 手前0.19 手前雨樋0.19 ポンプ側0.18
 中建屋側0.15 木下0.19 奥小屋側0.16
 ホール0.23 ポンプ下0.17

○旧事務所脇 牛舎側
 手前0.13 奥0.13

○駐車場小屋側木下表0.20 裏0.20
 中木下表0.24 J号後0.23

○事務所裏木下0.35 脇車側0.11



↑スマートフォンには、測定した線量や除染作業の記録が数多く残されている。

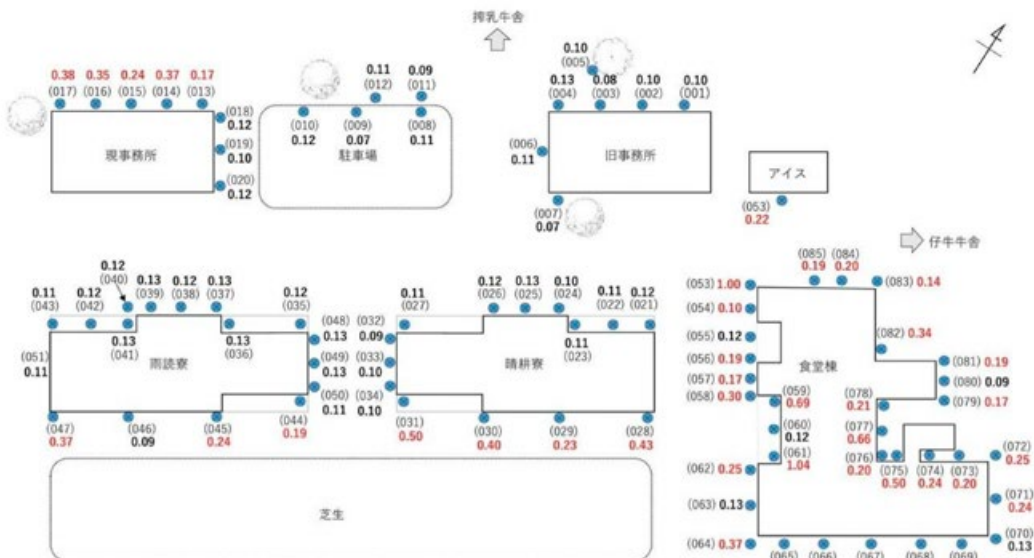
←コロナ禍では那須農場への出入りは禁止。行く場合は簡易検査を実施し学園に提出の上那須へ。



学園の定点観測とは別に、住居に特化したMAPで調査

那須農場 線量測定 (2021-2022年度) - 定点調査ポイント外 -

更新: 2022年04月17日



第3章

第3期 - 学生を那須農場に戻すために

線量計と自作の地図

第3期で私が基本としていたのは、空間線量計を常に持ち歩くことです。自分で農場の地図を作り、測った場所と数字を書き込みました。測定する、数字を書く、高ければ掘る、もう一度測る、まだ高ければ、さらに掘る。そして、0.13になるまで続ける。非常に単純です。ただし、単純だから簡単というわけではありません。むしろ手段が限られているので、難しかったともいえます。学園が安全判断の指針としていた定点測定地点は、数百か所ありました。専門家と相談して作られた地図で、広大な那須農場の安全性を確認するため、一定の基準で測定地点が配置されていたのだと思います。そのため、地点によっては畑の真ん中だったり、とても入りにくい雑木林の中だった



≡

伐採した枝葉 0.10

00m 0.14
05m
10m00m 0.11
05m
10m00m 0.10
05m
10m00m 0.16
05m
10m

伐採後0.16

【計測まとめ】

- ・木母で計測することで、問題の箇所がより明確になった
- ・枝葉の方が録量が高い、との推測であったが、地面が一番高いという結果かつ、晴耕／雨読寮前の枝葉を地上約10mを電線回避等もあり伐採を実施
- 伐採した枝葉の録量をまとめて図った際、0.10であり、問題は地面と特定
- ・次回、代替となる土砂を準備した上で、問題の木の周囲の地面を剥がし、残土は処分
- その上で再計測を実施し状況を見極める

00m 0.23
05m
10m

旧事務室

00m 0.24
05m 0.08
10m00m 0.11
05m
10m

駐 車 場

00m 0.09
05m 0.08
-- --00m 0.09
05m00m 0.22
05m 0.12

事務所

りました。

除染以前に、まずその地点へ到着するのが大変でした。ユンボ（油圧ショベル）でたどり着くために、何本も木を倒したこともありました。

第2期で行われた天地返しだけでなく、第3期では農場の端に3.5メートルほどの深く大きな穴を掘り、表土を剥いだ汚染土などを埋め、きれいな土で蓋をすることを繰り返しました。

私は学園の地図上の測定地点だけではなく、人が日常的に使う場所を重点的に除染しました。特に、子どもたちや学生が近くを通り、長く過ごす場所です。食堂棟、晴耕寮、雨読寮、事務室、旧事務室、職員宅などの周囲、駐車場などです。

見えない敵を、水の流れから探す

除染活動の難しいところは、セシウムが見えないことです。無色透明、無味無臭です。地面を見ても、どこが高く、どこが低いかは全く分かりません。そのような場合、皆さんならどうしますか。相手は無色透明、無味無臭です。私は空を見上げました。といっても、諦めたわけではありません。

空から落ちてきたものが、雨によってどこへ運ばれたかを考えるようになりました。屋根に落ちた雨は、雨どいへ集まります。雨どいを通った水は、縦樋から地面へ落ちます。水が集まる場所、地面へ染み込む場所、流れが止まる場所。そうした場所は、線量が高い可能性があるかと推測しました。

実際に、縦樋の下を測ると高い数字が出ました。70センチ、80センチと掘っても、なかなか線量が下がらないことも多々ありました。時間切れで一度埋め戻し、翌週もう一度掘ったことも珍しくありません。

何か所かは、掘った後に石を詰めて雨水槽を作り、表土に水が溜まらないようにしました。また同じことがあったとしても、表土が汚染されないための施工です。

木の上に原因があるのではないか

農場には大きな木が何本もあります。木の根元を掘っても、線量が下がらない場所がありました。原発事故から時間がたてば、雨でセシウムが木の枝や幹から地面へ移っているのではないか。そう考えて、まず地面を掘りました。

ところが、掘っても掘っても下がりません。そこで今度は、「まだ木の枝や葉にセシウムが残っているのではないか」と考えました。だとすれば、数値を下げるためには木の上も除染する必要があるのではないか、という仮説です。

そこで、高所恐怖症の先輩を引き連れて、2日間の講義と実技を受け、高所作業車の免許を取得しました。免許を取った後、まず先輩に木の上へ上がってもらい、線量を測ってもらいました。

かなり上まで登って測定しましたが、木の上の線量は高くありませんでした。つまり、私の仮説は外れたわけです。結局、また地面を掘ることになりました。

では、高所作業車の免許は何だったのか。高所恐怖症の先輩は高いところが嫌いなので、普段は木に登りたがりません。しかし、せっかく資格まで取得した、次のステップでは高所作業車をレンタルしないといけない、と思えば、結構上まで登ってくれました。恐らく、この免許がなければ上まで登ることはなかった。価値ある資格取得だったと思います。



木の上に原因があるのではないか――。
その仮説を確かめるため、高所作業車の資格まで取得した。
(運転しているのは高所恐怖症の先輩)

雨読寮の基礎が教えてくれたこと

除染にはいくつかのドラマが生まれましたが、特に印象に残っているのが、雨読寮の角の除染です。

雨どいの下をユンボで 80 センチ掘っても、全く線量が下がりませんでした。掘るエリアを広げようと、寮の壁と雑木林の木の間にユンボで通ろうとした際、雨読寮の基礎部分にキャタピラ部をゴツンと当て、少し崩してしまいました。

そばにいた先輩から、「また壊した」と喜ばれました。しかも写真まで撮っていました。私はぶつけてしまったので焦っていたのですが、先輩はニヤニヤしながら写真をちゃんと押さえていました。

「あーあ」と思いつつ、崩れた箇所をよく見ると、雨どいから流れた水が、基礎部分の亀裂から直接、基礎の中へ入っていることが分かりました。セシウムが雨水と一緒に運ばれ、基礎の中へ入り込み、結果として線量が高くなっていた。だから、周囲を掘っても全く下がらなかったわけです。原因は地面ではなく、基礎の内部にありました。幸い、その部分は建物の強度を支える基礎ではなく、外側から見える部分を整えるための、いわば「見せ基礎」だと分かりました。そこで思い切って基礎をさらに崩し、中の汚染土を除去しました。その結果、0.13 を実現しました。

この現象は、「また壊した」という安易なものではありません。私は「神のお告げ」であったと確信しています。

その後、南沢会で買っていただいた「まぜ太郎」でセメントと砂を混ぜてモルタルを作り、石をつけながら基礎を再成形しました。ですから、寮の周りの角を見て、「ここだけ仕上がりが雑だな」と思う場所があれば、残念ながら私の仕事です。

とりえず除染を優先し、きれいにするのはいつでもできると思っていたものの、きれいにするタイミングが訪れていないだけです。多分来ないだろうとは思っています。



周囲を 70-80cm 掘っても線量下がらず。よく見れば基礎に亀裂が入っているが、当時は徹底的に高圧洗浄機で洗浄するしかないと思っていた。やはりそれではコンクリ部は奇麗にはなるものの、線量計は反応せず。



線量が落ちないなら掘るエリアを拡大しようと、木と寮の壁の狭い隙間を通っている際、ゴツンと(▽▽;)神のお告げがあった貴重な瞬間！



線量計で確認しながら汚染土を徹底除去。



雨どいから基礎面に落ちる場所に亀裂が入っていると、そこから雨水とともに基礎の内部に入り込むため、基礎の内部が線量が高く、除染をするためにはハツリによりコンクリートを一旦崩すという作業が必須。写真は何でも出来るJ71 ハツリ女子。

徹底的に中の土をかき出し除染。そのコンクリートで再成形。ついでに雨どいを延長し地面に雨水が流れるように。地面は石を埋め尽くし水はけをよくしています。

一人でコンクリを練って成形は大変な作業。ここで大活躍したのは、南澤会でご買っていただいた電動コンクリートミキサー「まぜ太郎」。南澤会の方々に感謝深謝。

除染風景いろいろ



旧事務室（現在は取り壊し跡地）前の木の除染。
大きな木のため、雨によってセシウムが枝や幹から地面へ移っているのではないかと考え、木の周囲を除染。根を傷めるわけにもいかず、幹の下は手掘りで作業した。



友の会部屋横。
小さい子ども達が集まるところ。より念入りに。



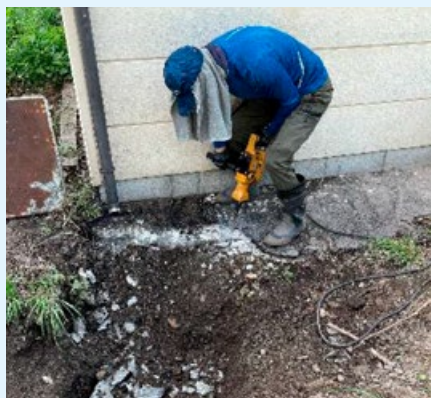
事務室裏。高圧洗浄機、掘削、線量低下後に埋め戻し、土間コン施工。



住居周りではない学園の示す定点測定地点。この辺りの除染は基本天地返し。
2～3mほど掘り、最初の1m分を先に埋め戻し、最後に蓋をして終了。

結構苦戦した晴耕寮前の駐車場

非常に大きな木があり、永年の雨で地面に落ちてきたのだろうが、マス目上に計測すると見事に木の形に合わせて線量が高い。都合3-4回は表土を剥がして整地を繰り返して、最後は大量の碎石を入れて蓋をする。
写真はFBで“ランマー女子募集！”で助っ人に来てくれた女子部68回生。FBで募集する際も安全な場所で、かつ柔らかな表現で告知。



意外と苦戦したのが食堂周り。掘っても掘っても線量下がらず。徹底的に高圧洗浄機で壁から洗うも下がらず。基礎周りのコンクリートに亀裂が入った状態だったため、これをハツって除去。徹底的に中の汚染土を除去し何とか除染終了。写真は献身的に除染を手伝ってくれた高所作業車資格を持つ先輩 D45。と、何でもできる J71 のハツリ女子。



晴耕寮食堂側角も難所。周囲を深く掘るも線量下がらず。雨読寮の事例にならない、こちらも見せ基礎を崩し汚染土を徹底除去。最後にコンクリ成形をして完成。

第4章 一人ではできなかった

第3期の活動は、基本的には一人で再開しました。手弁当の活動ですから、人を誘うことは簡単ではありません。Facebookなどで広く呼びかける方法もありましたが、「那須農場は、まだ除染が必要な危険な場所なのか」という印象を与えてしまうのではないかと。そう考えると、安易な発信もできませんでした。そういう点では、辛い時期でもありました。

それでも、実際には多くの方に支えていただきました。

何も言わず、草を刈り続けてくれたIさんのご主人

元那須友の会のIさんのご主人は、何も言わず、毎週のように那須農場へ来て草を刈ってくださいました。草刈り機は農場のものを使っていただきましたが、燃料はご自身で持参されていました。

除染を始める前には、まず草を刈らなければなりません。献身的という言葉だけでは足りません。ご主人が草を刈ってくれたから、私はその後の除染作業ができたことは間違いない事実です。

「また、なーさんか」

また、掘り進めていくと、地中の配管に出会うことができました。事前に図面などを確認していても、ゴツンとやってしまい、「あれ、ここにもあったのか」ということが何度もありました。

そんなとき、すぐに飛んできてくれたのが、農場の水道設備を見ている水工技研のNさんです。「また、なーさんか」と、何度言われたか分かりません。

確かに当時、いろいろなものを壊したのは事実です。セシウムは見えない敵ですが、私にとっては土に埋まった配管も見えない敵でした。その結果、農場では、「壊れたものがあれば中村のせい」という印象が広がりました。

さらに悪いことに、本当に壊した人が名乗り出なくなるという文化まで生まれました。現在は、スーパースターの壊し屋、尚矢君のおかげで、私のイメージも完全に回復しています。

「あと旧事務室裏だけだから」

そして、1学年先輩のF君（45回生）にも長く手伝っていただきました。どうやら私は、「除染は、あと旧事務室裏だけで終わるから、それだけ手伝って」と誘ったそうです。どう誘ったかは、失礼ながら全く覚えていないのですが……。

ところが、旧事務室裏だけでは終わりませんでした。少なくとも3年は手伝ってもらったと思います。今は福岡へ引っ越していますが、それでも年に4回ほどは労働に参加してくれています。

私が一人で始めた活動ではありますが、一人で完成させた活動ではありません。上級生、下級生、男女という区別なく、また卒業生ではない方々、那須地域の方々にも多く手伝っていただきました。

改めて、協力いただきました皆さんに御礼申し上げたいと思います。

第5章

学生を那須農場に戻したい

「吉一先生なら、どうしただろう」

那須農場にいる際、私は何度も、「創立者である吉一先生なら、どうしただろう」と考えました。やはり自由学園で判断する場合の原点にあるのは、創立者の思想であると考えているからです。

松原君が、1952年に製造されたファーガソン社のTEA-20型トラクターを農場で発掘したことがありました。これは栃木県第1号機といわれるトラクターです。松原君は、それをオーバーホールしようと目を輝かせていました。

そこで、「学生にやらせませんか」という話をしました。すると松原君は、すぐに講師を探し、資金を集め、リーダーを立て、あっという間に学生の活動として形にしました。あの瞬発力、馬力は、本当にすごいものでした。

やはり、「吉一先生ならどうしただろう?」と考えたことは間違っていなかったと確信しました。



学生にも経験させたかった

私は除染活動をしながら、国の長期的な目標を達成した後の作業については、吉一先生なら『安全管理をした上で、学生にも経験させてはどうか』と考えたのではないか、と何度も思っていました。

もちろん、放射線に関わる活動ですから、保護者の安全管理に対する理解を得ることは必要です。簡単なものではないだろうと思います。ただ、希望者だけでも良いのではないかと、とも思っていました。

除染活動には、多くの学びがありました。どこに問題があるのかを見つける課題発見力。どのような順序で作業するかを考える段取り。お金や道具が十分でない、あるいは全くない中で施工方法を考える創意工夫。さらに、土木、水道工事、左官、造園という仕事。ダンプ、ユンボ、ローダーの運転。そして、教習所での高所作業車の運転（笑）。

これらは教室だけでは得られない、非常に濃い経験であったと思います。できることなら、土日だけでも、希望する学生に経験させたかった。そう思いながら活動が続けていました。

「神の忖度」と呼んだ 0.13

実際の除染作業では、思うように線量が下がらないことが何度もありました。0.18や0.22とやや高いのだけれど、なかなか下がらない。特に、0.23を大きく超えている場所を0.13まで下げるのは簡単ではありません。

高圧洗浄機で洗う、測る、掘る、そして測る。まだ高い。さらに掘る。また測る。それでも下がらない。少し場所を広げて掘る。水の流れを考える。土を入れ替える。埋め戻す。そして最後に、もう一度測る。

苦労の連続ではありますが、線量が高ければ高いほど、最後に測るとなぜか「0.13」と表示される現象が何度かありました。私はこれを、「神の忖度」と呼んでいました。測定は空間線量なので多少のぶれがあります。翌週測ると0.13ではない場合もあり、再度除染ということもありました。しかし、苦労した最後に0.13が表示されると、本当に救われた気持ちになりました。

自由学園 100 周年に、修養会をプレゼントしたい

ただ、0.13という数字に近づけるためには、毎週那須へ通い、何度も掘り直す必要がありました。その原動力になったのが、「自由学園 100 周年に、学生へ修養会をプレゼントしたい」という想いでした。

第6章

やっと戻ってきた

そして、これから

那須農場でしか得られないもの

私の学生時代からは、だいぶ時代が変わりました。かつて那須農場で行われてきた労働教育や、共同生活を通じた一体感の醸成も、「今はプログラミングやオンライン上の共同作業で学べる」と言われるかもしれません。

もしかすると、「これからの教育には、那須農場は必要ない」と言われる可能性もある。そんなことも、頭の片隅にはありました。

それでも私は、那須農場でしか得られないものがある。土に触れ、汗を流し、仲間と一緒に働き、食事をし、いろいろな人と語り合う経験には意味がある。そう信じていました。

何年ぶりの修養会が実施！

そして、那須農場への学生の立ち入りが解禁され、学部2年生か3年生だったと思いますが、修養会の一環として、学生たちが那須農場でも時間を過ごすと言いたときは、本当にうれしく、涙が出ました。

一学年の学生が来るとなれば、久しぶりに観光バスが農場へ入ってくる、と考えました。すると今度は、「バスの運転手が嫌がりそうな木の枝を切らなければ」と思いました。そこで、すぐ近くにいた松原君に手伝ってもらい、枝を伐採しに行きました。

そして、実際に学生たちが那須農場に入り、食堂で修養会の懇談をしている様子を見たとき、

「やっと戻ってきた」と

肩の荷がおりた感じでした。



これからの那須農場

私が除染活動をしていた頃、「できれば学生にも、この農場で実際の課題に向き合ってもらいたい」と思っていました。

自由学園は、社会をよくする学校です。いま酪農は、飼料や燃料費の高騰、後継者不足などによって離農者が増えています。多額の設備投資を行い、省力化することは簡単ですが、中小規模の農家にそれができるかは別問題です。そこで価値があるのは、自由学園が得意とする創意工夫ではないかと思っていました。

例えば、学生が牛舎に張り付き、タイムスタディを実施して牛舎仕事を理解する。そのうえで他の農場でも働き、併せて課題や改善点を学ぶ。農場職員と新牛舎の新しい構造や仕事の流れについて検討し、新牛舎のレイアウトを作り上げる。そして「学生による牛舎建設」としてクラウドファンディングなどを実施し、新しい牛舎を建造する。そんなことはできないだろうか、と考えていました。

また、牛乳を軸に高付加価値商品を開発し、6次産業——加工から流通、販売まで——によって収益を上げる。少量ではあるものの、卒業生が経営している飲食店も含めて流通を確保すれば、不可能ではないと考えます。そしてモデルケースを構築できれば、地域農家の模範にもなるのではないかと。

那須農場には多くの竹が群生しています。切ろうが抜こうが生えてきます。一般には「竹害」と言われています。しかし、発想を変えれば無限の資源です。牛の飼料にできないか、土壌改良剤として畑に撒けないか。十分に研究対象になるだろうと思います。実現すれば、社会課題の解決にもなります。

近年、那須農場では有機農法による米作りやRO農法が学生によって実践されています。しかし、そこには残念ながら「牛」がいません。

極論を言えば、自由学園は当初から食育や農業、園芸、果樹にも力を入れています。それに酪農を加えて、農学部のようなものを作る。そして1～2年生は那須キャンパスで過ごす。そんな時代が来ないかな、と夢見ながら過ごした5000日でした。

その先にある「安心」を目指して

最後になります。第1期では、事故直後の混乱の中で、職員や関係者の皆さんが農場を守りました。第2期では、卒業生を中心とした支援活動によって、国の目標である0.23をクリアしました。そして第3期では、学生を再び迎えるために、0.13を目指しました。

0.23でも、国が示した長期的な目標を達成した環境でした。それでも私たちは、その先にある安心を目指しました。

私が一人で始めたように見えた活動も、振り返れば、多くの方の草刈り、修理、差し入れなどの支援や励ましによって支えられていました。この場を借りて、改めて感謝申し上げます。

除染は、見えないものを相手にする活動でした。なかなか数値が下がらず、「本当に0.13にする必要があるのか」と考えたことも、一度ではありません。

毎週通う交通手段を新幹線からダンプに変え、那須の土を南沢へ運び、南沢の土を那須へ運べば、結果として南沢と同じ環境になるのではないかと考えたこともありました。なぜか賛同は得られませんでした（笑）。

また、学生を那須農場に戻したいという気持ちだけで、通い続けられたわけではありません。さまざまな思いもありました。しかし、ただ意見をするだけでは、何も変わりません。結果を考えた際、自分で動くという選択をしました。

人がもっと話せる場所に

とはいえ、今日、こうして学生が農場を訪れ、新しい活動へ参加しようとしている姿を見ることができるのは、本当にうれしく思います。また、父母の方々にも来ていただき、うれしい限りです。

今日、これだけ多くの学生や父母の方に参加いただいたので、最後にお話したいことがあります。農場に学生を戻す、ということだけではなく、卒業生と父母、父母同士、そして学生が、もっと話せる場所にしたい、ということです。

少し話はズレますが、かつて男子の卒業生会である同学会の委員長をした際、高等科3年の親御さんから長文のメールをいただいたことがありました。その方は、お子さんが高等科で外に出るという判断をされた方でした。それに対して、私はさらに2倍、3倍くらいの長文のメールを返しました。

それで話は収まったのですが、その際に言われたのが、「もっと早く話がしたかった」ということでした。コロナ禍で、同級生の父母、先輩の父母、卒業生とコミュニケーションを取る機会が全くない。もっと事前にこういう話ができていると、今回出した結論が変わっていたかもしれない。そう言われました。

南沢会の労働は毎月1回実施しています。今日来ている卒業生が当たりかハズレかは分かりませんが（笑）、語り合う貴重な機会だと思いますので、今後も定期的に足を運んでいただければと思っています。今年度の委員会の方々は優秀な方ばかりなので、有意義な機会になると思います。

那須農場では14年前から毎月、支援労働を実施しています。昨年だったか、理事長から南沢会委員長宛てに感謝状もいただいている活動です。

今後は、私たち卒業生だけが農場を支えるのではなく、学生自身が農場で学び、考え、次の農場を作っていくてくれることを願っています。

以上、私が那須農場に関わった5000日の振り返りであり、中村の、ある意味「黒歴史」でした（笑）。

「あとは俺らに任せろ！」と言っていたいただいた今年度の委員の皆さんに感謝をして、話を終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。



おわりに

中村さんのお話は、東日本大震災後の那須農場で続けられてきた除染活動の記録であると同時に、「学生をもう一度、那須農場に戻したい」という思いを形にしていった5000日の記録でもありました。

0.23 から 0.13 へ。その数字の間には、測って、掘って、また測るという地道な作業があり、思うように線量が下がらない場所では、原因を考え、仮説を立て、試し、ときには失敗しながら方法を探していく時間がありました。そして、その活動を支えた多くの人たちとのつながりがありました。

やがて学生たちは、修養会の一環として、学園の活動で再び那須農場に足を踏み入れました。しかし、中村さんのお話はそこで終わりません。これからの那須農場をどうしていくのか。学生にとってどのような場所であってほしいのか。そして、卒業生や保護者、学生たちがもっと話のできる場所にできないか。5000日の先にある那須農場についても、学生時代からの仲間との関係性が垣間見える冗談も交えながら、中村さんらしい言葉でお話いただきました。

長年にわたって那須農場に通い続け、学生を再び農場に戻すために取り組んできた中村さん。そのお話からは、除染活動の記録だけではなく、活動をとみにした多くの人たちとのつながりや、那須農場への想いも伝わってきました。「知ること。伝えること。」では、これからも那須農場に関わってきた方々のお話を紹介していきます。今回は、女子部卒業生保護者の時高さんのお話をお届けします。